

式辞

本日は広島市立舟入高等学校第七十一回卒業式を挙行するにあたり、このような情勢の中、多くの保護者の皆様にご出席を賜りまして、感謝申し上げます。

先ほど、三五五名に卒業証書を授与いたしました。卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。皆さんのこれまでの健闘をたたえ、あらためて敬意を表します。

保護者の皆様。お子様のご卒業おめでとうございます。新たな門出に喜びも一入と拝察いたします。私ども教職員は、その都度最善を尽くしたつもりではございますが、至らぬ点もあったと思います。にもかかわらず、本校の教育にご理解をいただき、一貫してご支援を賜りましたことに、心より御礼申し上げます。加えて、平成三十年夏の西日本豪雨の際、混乱の中、生徒を学校に送り出していただきました。本当にありがとうございました。

さて、卒業生の皆さん。広島市立のすべての高等学校では、卒業証書に折り鶴を再生した紙を使用しています。世界の人々の平和への思いや願いを共有し、継承し、さらに郷土広島への愛着や誇りを一層強く持ってほしいという期待してのことです。本校は原爆によって六七六名の尊い命を失った広島市立第一高等女学校を前身とする学校です。ですから皆さんには二つの役割があります。一つは聞き手としての役割、もう一つは語り手としての役割です。

平和記念資料館の耐震工事に伴う発掘調査で被爆時の生活用品が出土しました。黒焦げになった生活の跡は、そこにあった暮らしが根こそぎ奪われたこと、自分で語れなくなり、代わりに語ってくれる人までも根こそぎ奪われたことを物語ります。沈黙に耳を傾けて、皆さんが代わりに語って欲しいのです。それは、時空を超えて「置き去りにしない」ことなのです。舟入の皆さんにはその意味がわかると思いお願いしています。

さて、三年前の入学式で、

あまりに自由なのはよくない。

必要なものがみなあるのはよくない。

というパスカルの言葉を紹介しました。敢えてそのようなことを申し上げたのは、不自由であること、不便であること、不合理であることは、一旦立ち止まって考える機会、疑う機会を与えてくれるからです。新型コロナウイルスの件もそうですが、受験や日々の学習、部活動、学校行事、そして今、隣に座っているクラスメイトのことすら、三年前には想像つかなかったことではないですか。修学旅行で訪れた屋久島・種子島・知覧やコルマール・ジュネーブも同様です。そこには人がおり、異なる歴史をもつ社会や暮らしがある。見たり、聞いたりするだけでは何も理解したことにはなりません。これらの出会いを通して、あなたに驚いてほしかったので、舟入高校はこういう場を大切にしてきたのです。

ドイツの哲学者ヤスパースの言葉を借りますと、

驚きを感じない者は問いません。

秘密があることを知らない者は探求しません。

世界は複雑で、わかりにくく、その一方で環境問題、格差など大きな問題を抱えています。ある文学者が

「生きた者は、すべて矛盾においてしか表現されない」

と言うかと思えば、ある数学者は

「数学における存在の意味は、矛盾を含まないという意味である」

と言います。どちらの意味の「矛盾」も両方包み込んでいるのがこの世界です。わかりにくいからこそ、驚きや秘密に満ちています。苛立って、他方を切り捨てたりしないこと。油断せず「私は何をしているのか」と問い続けること。その繰り返しの三年間は、君たちにとって試練であったでしょう。ささやかであっても、それを経て、この日を迎えていることに胸を張ってください。と同時に、それを可能にしてくれた人のことを思い浮かべて下さい。

終わりに、皆さんに、モンテーニュの言葉を贈りたいと思います。

高邁な精神は決して自分の中にとどまっていない。

それは常に望んで止まず、自分の力よりも更に遠くを志していく。

「遠くを志す」とは、自分で作った壁を乗り越える意志をもつことです。

「憎しみ」など、確信が「ありすぎる」感情を疑い、物事をよく見極めるため問い続けること。

最後に、このことをお願いして、式辞といたします。

令和二年 三月 一日

広島市立舟入高等学校

校長 日浦 毅